昭和十二年三月廿五日第三種郵便物認可
昭和十二年四月一日發行（毎月一回）
【道頓堀】第百廿七輯第十二年四月號

芝居の研究雜誌

道頓堀

第十二年 第百廿七輯

特輯

春と芝居

松竹少女歌劇

あしべ踊

待望！皆様の柳太郎映画近日封切

頭音ひらめき

原作・脚色　依田義賢
監督　木村恵吾
撮影　吉田清太郎

大友柳太郎主演

新興京都特作

高津慶子
千代田勝太郎
松本泰輔
荒木忍
葛木香一
東良之助
松田三郎
原聖四郎
梅村蓉子
白石明子
小泉嘉輔
舟波邦之介
伴淳三郎
川崎猛夫
伊吹草之介
水野浩
森肇
田世津子
甲斐
櫻井勇
片桐恒男
池欽子

風味必ず御氣に召す

天ぷら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席で是非御會食を！

支店

大阪支店　心齋橋筋八幡筋角

京都支店　北新地裏町　木屋町ドングリ橋

★道頓堀 第十二年 第百廿七輯 目次★

◆巻頭のことば……

フラグ

◇中座彌生興行大歌舞伎舞臺面◇歌舞伎座四月興行曾我廼家五郎劇特寫集◇浪花座家庭劇創立十周年記念興行第二陣舞臺面◇角座あしべ踊特寫集◇文樂座四月興行舞臺面◇南座・久方振りに京都出演のT・S・S・Kの華かな舞臺集

隨筆　春閑妄語……行友李風（一四）

隨筆　病床から春、女、芝居（絶筆）……津村京村（一六）

隨筆　櫻、女、芝居……安部豐（一八）

隨筆　櫻、女人、舞踊……永田龍雄（一九）

さくら……大村嘉代子（一五）

女清玄……中山楠雄（一三）

櫻に因んだ芝居……菱田正男（一三）

春芝居幻想……西尾福三郎（一四）

春の女……池田鐐子（一七）

明治初期故優追憶……高安吸江（二六）
旅で拾つた話……長島丸子（三〇）
京都の憶ひで……青山圭男（三一）
特輯　南地名妓の横顔……北川康男（三四）
ドウトンリボン　女、櫻、芝居……大槻たもつ作畫（三六）
セクシヨン　タ―キー花とともに……須田寛二（四〇）
これはお若い……（四二）
ユーモア小説「朗かな人たち」……河田靜（四三）
新版良人の貞操（マン畫）……大西のぼる（四一）
その時折の記……姉小路孝（四七）
三月觀劇日誌……大橋孝一郎（四六）
道頓堀俳壇……日比煤裝選（四九）
讀者欄……（三三）
投稿規定……（三三）
編輯後記……大橋孝一郎　池尻勝彦（五〇）

酒銘
白雪
シラユキ
しらゆき
元賣發
鹿島本店
電北二七二・二七二八・八三五九一番
小西酒造株式會社
攝津伊丹灘

座中—居芝大の春

〃侍舎田〃

臺面舞場の門裏の城條二（上）
郎三爲原岐土の夫太小（右）
妙お妹の子咲柳
喜慶川德の車魁りよ右（下）
郎次半村中の郎三吉
藏平田内大の郎三壽

中座――〝二月堂〟

壽三郎の良辨大僧正
魁車の渚の方
吉三郎の宮奴春人
芳子のお千世

五郎劇團

一日初日　四時開幕　各等割引値段

新作に力作で五郎大熱演!!

◇毎日五時開幕◇

1 根のない爭議　一場
2 情話 紅白餅　二場
3 二人のアルバム　二場
4 無軌道の戀　一場
5 鼻の六兵衛　二場

日曜マチネー　二時開幕

◇春の運動會と慰安會は五郎劇とお決め下さい團体御觀劇御得意樣の御招待などは特に御物談申上げます

◇一等席は五日前より二等より櫻までは前日より發賣いたします

前賣團体專用電話（戎）二八二八六

◇觀劇御宴會券

御一人樣　三円八十錢

御場席は一等席
御食事は洋食又は和食
繪本番附共

◇御申込は二十人樣以上に願ひます◇

初日割引値段

櫻・三十五錢
菊・五十五錢
二等・一円八十錢
三等・二十錢

大阪歌舞伎座

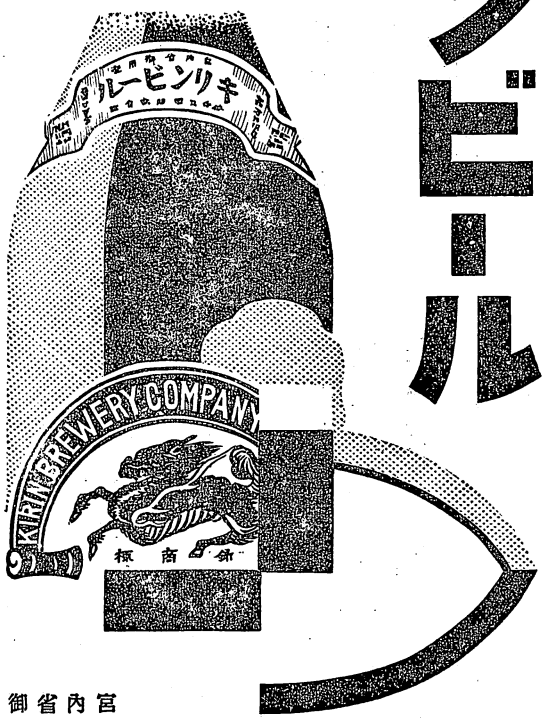
キリンビール

最古の歷史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン

絶對着色なし



宮内省御用達
麒麟麥酒株式會社

K3

春の大芝居中座

面臺舞 衛兵郎八まつお　（上）

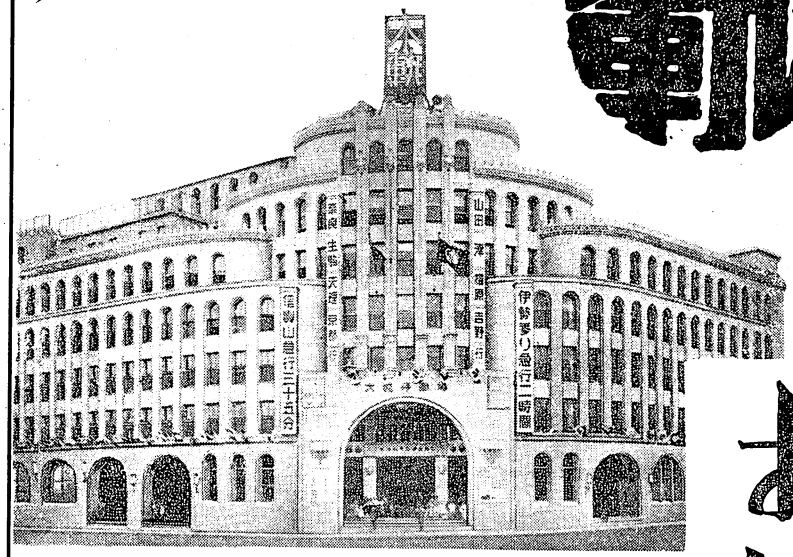
面臺舞 髭釣巽戀寄　（下）

左上より魁車の　おつま
壽三郎の　八郎兵衛
小太夫の　香具師彌兵衛

——行興月四座伎舞歌

一ノ其集眞寫 "臺舞座一郎五家廼我曾"

自慢の百貨



お買物は

早朝サービス

場賣階一 ● 店開時七前午り限に日祭・曜日

ムルイフ眞寫・酒洋和・物果・子菓・詰罐・當辨

營業時間	無料配達
場賣 午前九時より迄時九前午	大阪全市及大軌沿線
食堂 午前十一時より迄時十後午	吉野線參急沿線驛留

大軌百貨店

大阪上六　電話天王寺(77)三一三一・三三三一番

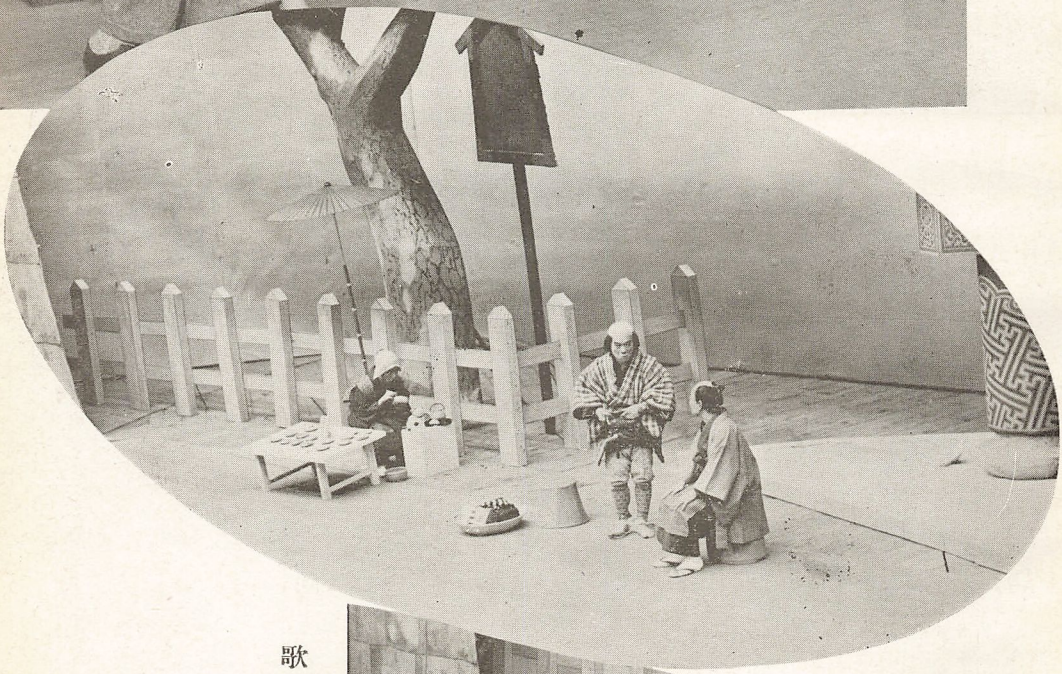
金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい

洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豊後町三番地

株式會社 横山商店



歌舞伎座四月興行——

五郎一座舞臺寫眞集其ノ二

浪花座四月興行——

陣二第劇庭家竹松の行興念記乙周十立創

舞臺面特輯そのー

○觀劇や映畫？
○道ブラの節？

相談が出來て
いそぐ湊町

明朗快適

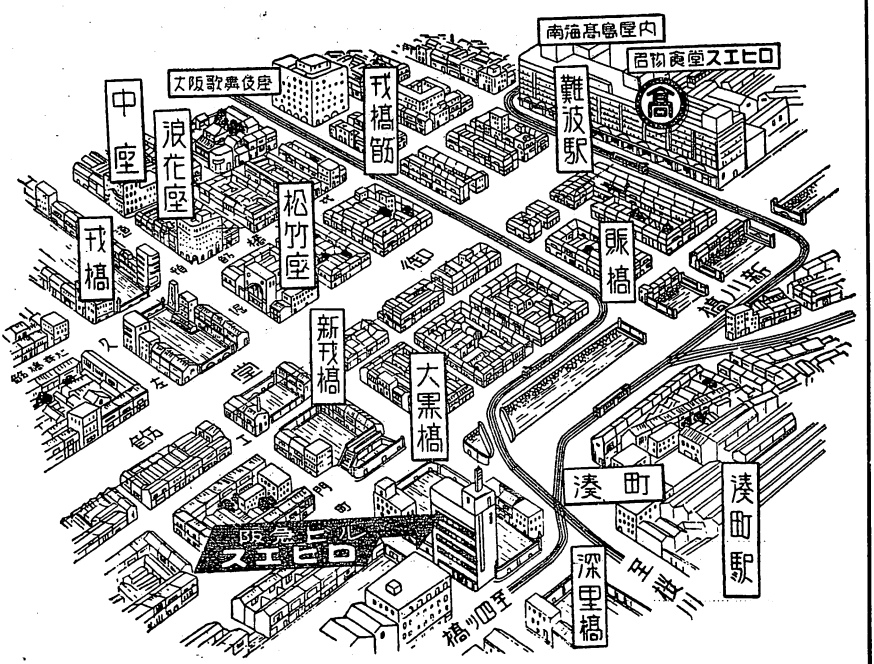
晝間は明朗　御氣分第一
夜間の眺望　大大阪第一

新設三階御宴會場　御利用願上候

大阪唯一　ビステキ專門店

湊町スエヒロ

湊町北詰（阪急ビル）
電話櫻川四七九三番



營經☆田安

○營業時間 朝九時より 夜八時まで

日本書籍銀行大阪支店

南區戎橋筋

○俸給生活者小口信用貸付取扱致します

○最も便利な當行を御利用下さい

広告商事社

と告廣傳宣るゆらあ

作製板看術美スセロプ

造勝中田

大阪千日前 電戎(76)三七九〇番(ルクナミ)

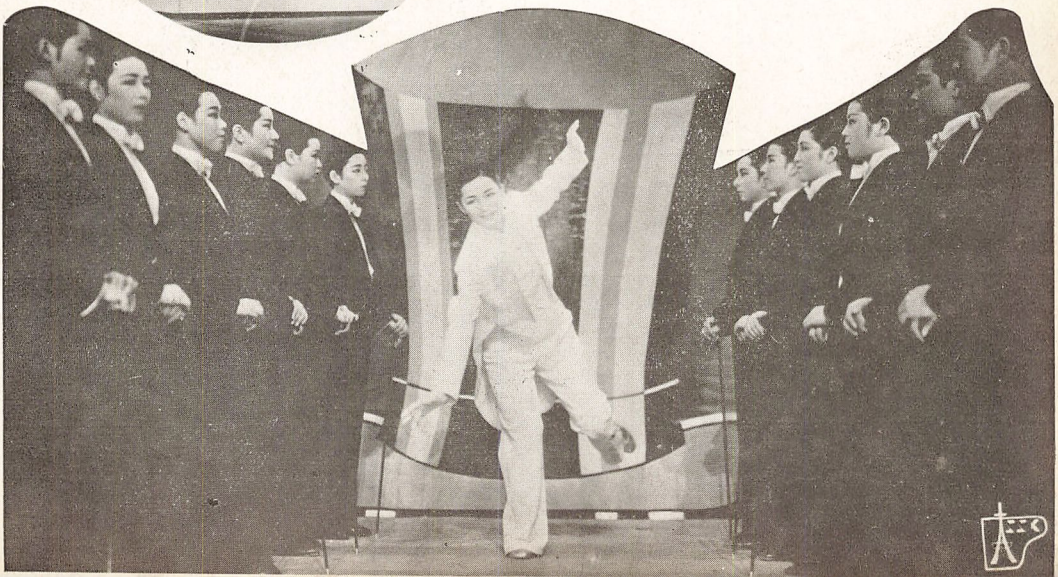
浪花座——

松竹家庭劇舞臺面　特輯その二

——座南都京

躍活のり振方久　K・S・S・Tのし懐

面臺舞〃**トツハラペオ**〃ーユヴレドンラグ

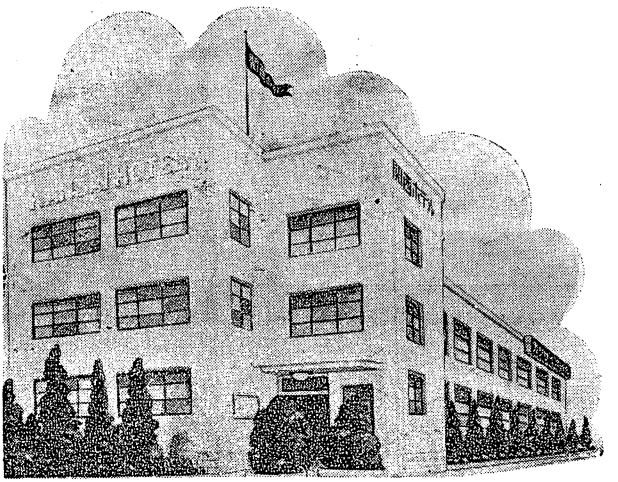


東京松竹少女歌劇春の特別公演

―京都南座―

日本名物
第五十三回　あしべ踊　花もやう十二景　どうとんぼり
角座

近代ホテルの豪華版
関西ホテル



大阪アベノ橋
市電交叉点東

電話 天王寺
3939. 3938. 3930.

宣傳廣告一般

アラキ廣業社

道頓堀松竹座地下室

春ごよみおぼろ

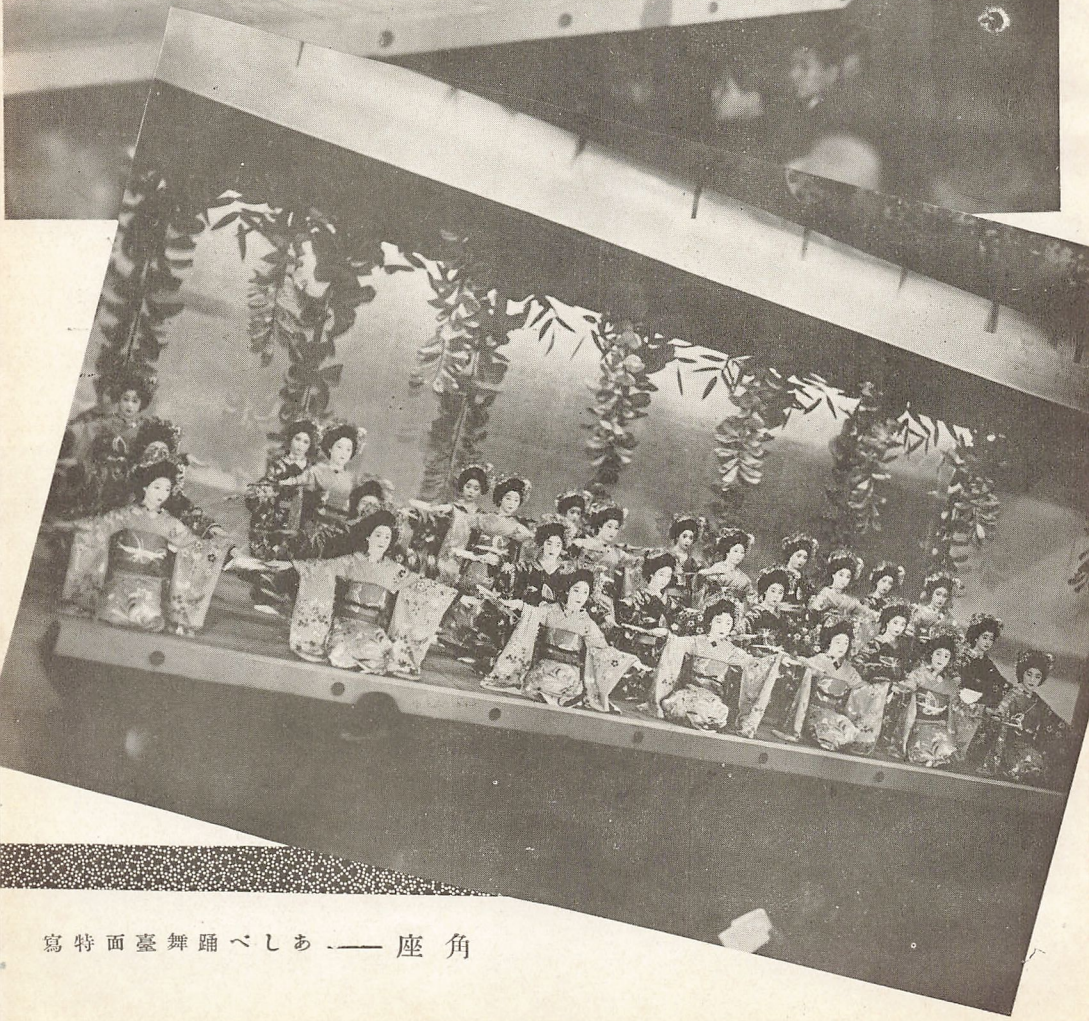
夜桜風景

斷然好評開催中

キャバレー

ライオン

新町　四一四〇番



角座——あしべ踊舞臺面特寫

〃戀飛脚大和往來〃 (上)

——新口村の段——

〃戀女房染分手綱〃 (中)

〃大　楠　公〃 (下)

文樂座人形淨瑠璃

——四月興行——

第十二年

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

四月號

第百二十七輯

『撫で斬る』とか『引抜き』とかイヤな言葉が春風に乘つて飛んでゐる。この月はお花見月で、櫻樹の傍らには『この花折るべからず』の制札が、どこの公園へ行つても出てゐる。美しい花に憧れるの餘り、それをこつそり折つて歸る花泥棒は、決してそれを轉賣する意圖はない。が、世に共存共榮を廣言する實業家が、この社會にのみは世間的な常識と德義を超越し、制札をねぢ倒し、平和な花園を荒し廻つても敢てそれが不德でないといふのか映畫俳優の引抜きをやつて、サアこの花でお互ひに儲けませうなんて虫のよい事をおつしやる。熊谷櫻には『一枝を剪らば一枝を剪るべし』の制札もある。が、それは骨肉相食む源平時代の思潮、共存共榮を廣義に解釋するなら『撫で斬る』『引抜き』戰自體がこの社會を暗黑化させるものではないか。お互ひに深く考へたい問題だ。

隨筆

春閑妄語

行友李風

（病牀の日當り、陽氣の加減か少し身體が溫か過ぎる）芝居の舞臺が如何に特異な世界であつたとて、或る程度まで季節の約束は保守すべきものと考へる。夏芝居に大雪の場を觀せられたり、冬興行を夏衣裳で演じられたのでは、どうも季節の感じがピツタリ來ない。

春の芝居は矢張り春らしく、櫻の釣枝にトヒヨの鳥の音、凡て絢爛溫雅といつた情景が望ましい。釣枝といへば櫻以外に松の釣枝、杉の釣枝、誰が何時頃から初めたのか眞に巧い、効果的な思ひ附きだと觀る度毎に感服させられる、偶には柳の釣枝なぞも、使ひやうに依ては面白からうと思はれる。

その春の舞臺で代表的な物——これは誰でも想ひ泛べる狂言で、第一が『妹脊山婦女庭訓』三段目吉野川の段。岩にせかれて漲り落ちる山川の流れを眞中に、上手が脊山、下手が妹山、双方とも瀟洒な見晴しの亭座敷。川の岸には櫻が咲き亂れ、妹山の方には雛を祭つて美しい姉が腰元を相手に節句のかしづき脊山の方には若い前髪の美男が机に對ひ經卷を讀誦してゐるといつた情景。幕が開いただけでもう既に、有韻の詩であり活きた錦繪である。

情景もさる事ながらその構想の妙、殆んど他に類型を索められない獨創の考案。この場に限らず四段目の杉酒屋、道行、御殿にいたるまで、作者は確かに大和一國の山河を俯瞰した氣で筆を執つたらしく、もしこの時代に航空の利便があつたとしたら、更にどんな突飛な趣向を立てたかも知れない。

だがこの狂言も關西の歌舞伎座では隨分久しく上演せられない。貫目揃ひ腕揃ひの俳優難と、時間の都合に煩はされてか、どちらにしても文樂の人形ばかりに委せて置くは惜い作品、そこを何とかならぬ物か知ら。

次はお馴染の『加賀見山舊錦繪』奥庭の場。これは妹脊の大道具と打つて變つて正面が黑幕、尤も中途で切て落して遠見の書割を見せるが、櫻、山吹の花物を配したゞけで、至極簡素な舞臺面。茲ではシト〳〵と降る雨の音、蛙の聲が有効に使はれて情緒を深める。

そして御殿勤めの老女と、召使ひの部屋者が、六段の合方で蛇の目傘の立廻り。勿論妹脊山ほど複雑な大芝居ではないが、闌けゆく暮春の感情が溢るゝばかり漂ふてゐる。大阪では最近、改作して一度上演せられたやうだが、恁うした狂言は矢張り原作の味をその儘翫賞してこそ、冗なところに潤ひと寛ぎがあるそこが俳優の藝なので、筋さへ通つて早解りがすれば可いのなら、寧そソツクリ御近所の映畫へ委せて置いたが安全。

さてその次はと丹念に一々並べてゐたのでは際限がない。要するに芝居は、藝道、落着いて翫味咀嚼してこそ醍醐の眞諦にも達し得られるといふもの。酒には酒の飲み方のあるごとく、芝居にも芝居の觀方といふものがある筈、また觀させ方もあるべき筈。なぞと下らぬ時勢後れの屁理屈は兎に角、當季々々に順應した狂言の建て方撰び方が、見物に對する仕打の忠實、俳優の忠實、旁以て藝道への忠實ではあるまいか。如何なものでござらうや。（時に來診の醫師檢溫して愕き、また譫言か、成程大分熱が高い、靜かに〳〵）。

さくら

大村嘉代子

すみぞめ櫻、切支丹櫻、隅田堤の櫻、どれも芝居の櫻は美しい。籠釣瓶や、鞘當の廓の櫻、勿來關の櫻、どの芝居も櫻の咲いてゐる場面は美しい。

一體、櫻といふ花は、吉野紙でこしらへても美しいものである。木振もあまりひねくれたのがないから、造りものでもさほど不自然でないので、造花でも興ざめがしない。舞臺の花は櫻が一番美しい。

その美しい芝居の櫻の中でも最も美しいと思ふのは小豆嶋の序幕の祇園の櫻である。歌右衛門のお才の方が何といふのか市女笠から薄絹がさがつてゐるあの笠を傾けて枝垂櫻の下を通る姿、今もまだ目に殘つてゐる。實に美しい。私の見た芝居の中で一番美しい櫻の花は彼の場面である。

病床から（絶筆）

春・女・芝居

津村京村

春が來た。女と花の美しい春が來た。機に乘じて『道頓堀』編輯部から、何かその二つに因んだ隨筆を書けといふ命を受けて、一旦お引受けはしたものゝ、實は小生昨秋來の大患今尙癒へず、六尺の床上に横つたまゝとて、萬事不如意、今年の春は、花も女も只床中に在つて仄かに幻想を樂しむより他無い狀態故、さて書くとなつても餘り纏つた材料が浮んで來ない。

然し――春と女――櫻と芝居！　さう聞いた丈けで忽ちわれ〳〵の眼に浮んで來るものは、あの見るも華やかな『鞘當』の一場面である。

パツと明るい吉原遠見！今を滿開の櫻並木！そして粹な姿の山三と伴左衛門！この嗔嘩に飛込んで來るあでな婆の留め女！まことに絢爛目を奪ふばかりの畫面である。

理屈から言つたら、まことに他愛も無い芝居ではあるが、然しこれは又これで豪華な江戸の春を偲ばせる明るい一幅の畫面としてでも充分存在の價値がある。

× × ×

一と頃流行つた新しい史劇の中には、隨分と櫻の花が使はれたものだつた。『花も散るわと』いふ樣な感傷的な一語と共に哀れ紅ひの花片がハラ〳〵と散つて靜かに幕が閉される。

かういふ幕切れは、昨今の所謂『新劇批評家』から言はせると、餘りにも物古びたと恐らく一笑に伏してしまふに違ひないが、然し私などは、今尙、あゝした情景を使つて見たくなる事がある。自然と人生の或る刹那的な結ばれ合ひ！其處には言ひ樣も無く泌み〳〵とした永劫的な情感がある。そしてその情感こそ、一つの大きな劇的要素であるとも言ひ得るから。

× × ×

櫻花の持つ容姿そのものは宛然美女の如く濃艶だが、その生命は恰も戰場に於ける武士の如く、儚ないものであり、又勇猛果敢である。さういふ意味でも櫻花と芝居は、自ら結ばれ合ふべき因緣がある樣に思はれる。

× × ×

もつと何か書きたいと思つたが何分前にもいふ通り病臥の身まアこの位ゐで――

春の女

池田鑠子

班女の前

散りうく花を、いざや掬はむ……。四手網を手に櫻の花びらを、すくひとらむと、現なき狂女は彷徨ひあるく、吾子故に思ひ亂れた母の姿、春のなまめかしさといはむよりは、もつと嚴蕭な心持の躍動が私の涙を誘う、子を戀ふ母の亂ごゝろ、其れをうつした賤機帶の狂女は、いともあでにものがなしい。

雪姫

黄金に築く高樓の、人の氣配といつては更になく、入相もすぎて、あたりはほの暗うなつてゐる。

大木の櫻の梢は今ぞ眞盛り、その根方に、侍られた雪姫の姿は、氣高くもなまめかしい、散り敷く櫻に埋もれなげく雪姫の心には、春の感傷に想ひ浸るといふ、若い女の惱ではない思ひがある。今宵に迫る夫の危難を救ひ、今しも耳にした仇敵の秘密、それにからむ姫自身の危險、それも、これも、かく縛められては、刻々せまつて來る時のきざみに、切りさいなまれる苦しみと焦慮とに、春もよそなる憂き苦勞に、悶え苦しむのである。しかし、この凛とした志を胸に包む美女の此懊惱が、複雜な心の悶えが、櫻吹雪といふ美しい背景の前に、繪と現じては、芝居の春の女を描く私の筆は、この雪姫を見逃しは出來ない、殊にも好きな姫の事である故に……。

祇園祭禮記の作者は、雪舟が故事を、再びこの舞臺へ持ち出して來て、櫻の花びらへ爪先のざれ書にして、鼠に縛めを解かさせてゐる。花、姫、白い鼠、黄の太い繩、つと立ち上る姫の美しい姿、夕闇の中に一幅の繪を、極彩色に彩つたと云はないで何であらう。

靜御前

戀と忠義はいづれが重い……。舞臺一面櫻花爛漫とした中に、蹴跼の塔が丹塗も鮮かに描き出されてゐる。初音の鼓は、ぽゝと鳴り響いて、いつの間にやら、花道のすつぽんから、忽然と忠信の姿、かうして義經千本櫻道行の一くだりは始まるのである、赤地總縫の美しい靜御前と、黑地に金で源氏車の模樣の忠信とが、さす手、ひく手の踊の妙、春はこの三吉野の舞臺から訪つれ來るかと心ときめくばかりに誘はれる。

舞臺の春の女、書けば數限りもなく、あれか、これかと、迷うばかり、その中からこの三人を取り出して書いて見た、時は花に醉う春の最中の事なれば……。

隨筆

櫻・女・芝居

安部豊

『帝王の上なきに似る春の花』――晶子女史の詠んだ櫻花である。まことに、豪華絢爛の趣を呈する自然の景物としてこれに如くものはなく、その故にこそ歌舞伎の舞臺に用ひられてこれ程普通的な使途を有つものは無い。それ自體の効果としては勿論パッと眼も眩ゆいばかりの艶美華麗さを以て一瞬人を恍惚たらしめ美を更に美ならしめる爲のバックを成してゐるのであるが、劇作の手段は單にそれのみに甘んじられてゐない。その春――最も愉しみの極み、盛りの頂點、美と輝やきに配するに或は人生の無常を、或は運命の數奇を以てする時、その兩々相扶くるの對照の妓は竭しがたい深刻な感銘となつて齎されて來る。おのづから哀れさを持つ月も雪も及びがたい複雜微妙にして、幽遠な情趣の將に今を盛りの櫻花にあるは此の所以であらう。

その一つとして思ひ出されるのは先年吉右衛門時藏によつて上演された清玄櫻姫――原作南北の『櫻姫東文章』――の三圍堤の場面である。默阿彌の骨寄せの岩藤は花見姿の亡靈ではあるが、それは單に外形的な怪奇さのみに過ぎない。此の櫻姫の如きは洵に異色ある埒外の一型であり、從つて花と人との對照、その相互扶助によつて釀される舞臺効果も亦稀有なもので有り得たのであつた。尤も南北一個人の著作のみを縱に見れば少しも不思議はなく型破りが此人の常態なのであるが――。

吉田少將の息女として生れ、綾羅錦繡の裝ひに包まれて深窓に人となりながら、櫻姫の運命の流轉、顚落は寧ろ慘鼻を極めたものであつた。素性も知れぬ男の慾情に肌身を汚され、子まで生み落さねばならなかつた事から、姫の身内には妖しい血汐が目覺めて行つた。そしてそれは道德堅固な聖として尊まれた情玄を破戒無慚の惡僧と墮落せしめ、その身はまた乞食非人の境涯に放浪するを餘儀なくされねばならなかつた。

生得の美貌はいよ〳〵妖しく、冴え墮ちる天女のやうにうらぶれた相の姫と、おどろおどろしい身裝をそのまゝに、紊れ荒んだ肉體と精神を穢れた執拗な慾望の熾烈さで繫ぎ止めてゐる破戒僧――此の二人がゆくりなくも行き違ふ三圍堤の時は春、櫻花は盛りを誇つて咲くのである……。爰に詩の把握がある。無心に咲く花に例へば嬰兒の微笑のあまりに清淨さが却つて人の心を痛く打つ如き効果に外ならない。それに對するものは肉

身の相に深く沈潛していよ〳〵惡を醜を明らかにするけれど、此の兩者の照應は犀利なメスのやうに心に觸れつゝも搖曳する美しき哀愁を靄の如く立ち籠めて、美は美、醜は醜なるまゝに押包んで餘韻嫋々の情趣を香渺と漂はせつゝ行くのである。

櫻姫と櫻花——名こそ相似たる如くにて甚で懸隔するもの、その妖冶と清麗とを一處に見る時、彼の女の頽廢美は忘れがたい。

讀者通信

一、締切は毎月二十日。

一、範圍は演劇、映畫、レヴユーに關するもの。

一、一回四百字以内。

（實質ともなのは特に長くてもいゝ）

（ながすぎまり）

一、宛名、大阪市南區久左衛門町八

松竹ビル内〔道頓堀編輯部〕池尻宛。

一、但し原稿は一切返戻致しません。

御觀劇には

芝居の切符はプレイガイドでお求め下さいますのが一番お徳で御座いますお場席もよろしいし一枚の切符でもすぐお屆けいたしますことに團體にて大ぜい様御觀劇の場合は特にお安く相談いたします。

プレイガイド觀劇會

月組新會員募集中

月額　金壹圓也

詳細は當店へ

御一報次第プレイガイド月報御粗呈致します。

大阪渡邊橋　朝日ビル一階

北濱(23)三三〇九　五九九三番

プレイガイドの御利用を

隨筆

櫻・女人・無踊

永田龍雄

もう、けふあたり英國大使館の前どほりを、電車の窓から見てとほつたが、蕾がだいぶ青白くふくらんで見えてきた、このぶんでは月の終りごろは花のさかりとなるであらう、大使館の庭隅の、あの、國旗掲揚の白塗りの高檣がたつた下あたりには黄ろい蓮翹の花が、花蕾りめく薄日に透けてうつくしく黄ろくこんもりと咲いて居た、けふは、春だなあとおのづから思はせる靜かな日だ。

この頃の季節は溫かになつたと言つても、溫かな底に冷んやりした感觸がまだ殘つて居て、雨でも降らうものなら、またすぐきのふの冬の顏が見えるのである、梅と言ひ櫻と言ひ、よくもこんな寒いうちにうつくしい花をさかせるものだといつも感心をする、紅梅なぞ、もう、殘花が火の消えかつたやうに樹梢にへばりついて居るのは、なんとなく過ぎた季節の忘られた顏をみるやうで憐れに見えるが、紅梅が枯れると白い辛夷がさき木蘭、木蓮、桃、海棠などが櫻の花のさきぶれしになつて薄青い空に咲いてくる。

それから櫻だ。……

櫻と言ふとすぐ、わたくしは都をどりをおもひだす。櫻、女人、舞踊——と言ふと、これはもう京阪の天地の春のものだ、堀江のをどりはまだ寒いうちに始まるが、あのつなぎ團子の紅提灯がかゝる京都の四月こそは、なんと言つても、東京のわたくしどもが夢に見るほどうつくしい情緒の天地である。わたしは京阪の春にそむくこと、もう、六年にもなる、夢も祇園の夜ざくらの白々と淡いなげきをみせるのだ。

新橋の東をどりではどうも春だと言ふ感じがでない、あの邊の暗い家影と水影が、たゞ冷たくて、銀座がいくら明るくても演舞場のあたりのうす暗さは、いくら酒に醉ふて居ても、春の夜の愁のみがわたしを寂しがらする、祇園のやうにまち全體がをどりの氣分に融けあはぬのだ。——それにことしは東をどりの臺本を書いて居た中内蝶二老も死んでしまつてなんとなく、あの顏が廊下に見られなくなる寂しさも、わたしの胸の中にあるのだ、が、蝶二君のかわりに田村西男君の江戸つ子の氣輕なやゝ白髮まじりになつたけれども、いつまでも若やかな顏が、ことしから見られることは寂しい中のうれしいことだ。

都をどりでも東をどりでも季節が春ゆえに、どの幕かにはか

ならず舞臺いちめんが櫻の花ざかりになる。このごろではレヴュウの影響で、花咲雪の僚亂とみだれちる幕がある、花かをみなか、うつくしいと言つて、これほどうつくしい舞臺と言ふものはあるものでない、よしそれはいさゝか月並の感じはあつても、あくまで見物はその豪華な舞臺面に醉ふのである。

紙のさくらにも情が含まれて額つきの透しい女性の、うすら汗ばんだ白い襟もとへ、はらりほろりと雲か花かの瓣がまきつきこぼれてもくる、黑髪へ、頰へ、眼へ、まだ肩あげのとれぬ雛妓の友禪の肩さきへ、――そして三絃の響きがいやが上にも日本人の傳統の――さくらを好き熱血を湧き起こさせる。――舞臺の昂奮、見物の昂奮、それが一緒に融けあつて、劇場のなかに華やかに、うつくしい渦をかもす、くれないの渦、金色の渦。……

日本の舞踊でさくらのうつくしさを見せるのは、やはり〃道成寺〃が隨一だ『保名』もさうだ、『淸玄』もさうだ、『忠信』も『旅路の嫁入』もさうだ、『供奴』だつて、『春騎』だつて吉原の仲の町の背景ならかならず櫻が咲いて居やう。わけても妖艶な櫻なのは『闘の扉』の墨染ざくらであらう、『花車』では玉ゆら姫が花車を曳いてくる、その花車もさくら、その槍踊の槍にもさくらの花が飾られる、『花見踊』にもさくらが咲くが、なんと言つても『娘道成寺』が櫻とをどりがしつくりと紅の霞をひくのである、そしてわたしはそのむかし演じた『二人道成寺』のときの榮三郎と福助のかなしきばかりうつくしい舞臺をおもひだすのだ。

榮三郎も福助も夭死した女形の俳優であることは言ふまでもなからう、この二人のをどつた『二人道成寺』こそは世にもうつくしく寂しく氣品の籠つた所作ではあつた。……

榮三郎と福助をならべると、氣品の點で福助がやゝちよつと榮三郎を押えた、それだけ福助には言はふやうなき寂しさがどこかにつきまとふて居た、年若くして死ぬ運命でゐた二人の道成寺、絢爛たる舞臺の中にいまで思へば、あるはかなさが籠つて居たのだ、うつくしい二人の顏の、濃い白粉のおもかげの死繪となつて、雲母刷のなかのあやしい白蝶の幻影を、いま、わたくしは胸に描く。……

花か人か、花は散り人は死す。

ふたりの幻のうつくしさ、女形の幽靈のうつくしさ、花吹雪にふたりの蒼白き幽靈が顏、すうつと消えて、につことほゝゑむ、女人にあらで女形のあやしさは、浮世繪のあるかなきかのためいきに蠟の燭火のゆらめくが如く、さては三日月のちろうめく金粉の、若くさがうへにしつとりと落ちて臙脂の血の戀をもなるか、――二人あはれに、淨く、うつくしく、涙が白く

その逝きにし年はいつの年であつたか。

花をおもひ、女人をおもひ、舞踊をおもひて、わたしはそゞろに榮三郎と福助の寂しき淡粧の死繪にさくら吹雪をふりこめる。

——三月十六日午で——

櫻に因んだ芝居

菱田正男

櫻に因んだ芝居といへばいろ〳〵ある。

舞臺に櫻の便はれるもの、役名に櫻の文字を使つたものさま〳〵ある、この狂言の解說を一々やつてゐては大へんだが、そのうちでよく上演される有名なもの二三について少し書いて見ることにする。

櫻を背景の舞臺でまづ第一に指を屈するのが、誰でもスグそれと思ひ出す『京鹿子娘道成寺』だらう、六代目の舞踊で相當喧傳されてゐる。これは、

『道成寺再度の鐘建立の鐘供養を白拍子花子が拜みに來る、花子は實は淸姫であるが、女人禁制とて僧たちが止めるのを强いて所望するので、これを許し、その代りに白拍子に舞を所望する、すると白拍子は舞ひながら漸やく鐘に近づき、遂に鐘の中へ消える、一同驚ろいてゐるところへ花四天が來て鐘をあけると中から蛇體の鬼女が現はる、それを大館左馬五郎が現はれて押戻す』

といふ筋で謠曲と同じである。寶曆三年二月中村座で元祖中村富十郎が江戸下り初お目見得狂言の演し物で、當時非常な好評だつたさうで、この狂言だけは百二十五日間据え置きの打ち通しだつたといふ、そして芝居は二階三階ともに櫻の釣り枝に富十郎の矢車の定紋入りの提灯を釣り、樂屋では當り祝を振舞ひ富十郎の書いた『唉からは龍頭へとゞけ山櫻』の看板が人氣を呼んだとある。

現今では六代目の專賣物のやうになつてをり、あの肥滿した身體で白拍子に指し、巧みに踊る丈の至藝はいつも乍ら結構なものである。

次は淸元物で『道行旅路の花聟』があり、また淸元で『幾菊蝶初音の道行』常磐津で『道行初音の旅』がある、前者は『落人』後者はふたつとも『吉野山の道行』として知られ、ともに櫻を背景に使つてゐる、今更ら解說でもないが『落人』は〻假名手本忠臣藏〻の四段目、おかるが勘平がお家の大事を尻目に駈け落ちと洒落るもので、天保四年三月、河原崎座で當時の海老藏の勘平、菊五郎のおかるによつて初演された、今日では羽左衛門の勘平に、六代目のおかるが定評がある、これへ伴內が

絡み、櫻の枝を持つた捕手が勘平と地に合せて立廻りするところなどいかにも歌舞伎らしい氣分が出てわるくない。

『吉野山』は常磐津の方は文化元年八月、三津五郎の忠信、瀬川路之助の靜で中村座に初演され、清元の方は少しおくれて文化五年五月歌右衛門の忠信、路考の靜で上演された、吉野山の滿開の櫻を背景に靜と忠信の主從が哀しい戰話を交はすところへ早見の藤太が現はれて絡むのが丁度前の『落人』と同じ行き方でおもしろい。

それから『祇園祭禮信長記』がある、これは金閣寺の場で雪姫が大膳に櫻の大樹に縛られて散りしく落花を集めて足で地上へ鼠を描くと、その鼠が拔けて姫の繩を喰ひ切つて助けるといふ頗る馬鹿々々しい仕組みが殘つてゐる。この狂言は寶暦七年十二月大阪豐竹座の操つりに上場されたがはじまりで、作者は中村阿契、淺田一鳥、豐竹應律、黑藏主らだといふ、金閣寺の場は四段目の切で、歌舞伎に移されたのは同年冬からで、江戸では翌八年森田座がはじめたといふ說がある。

そのほか『櫻時雨』や『聚樂物語』『櫻川五郎藏』清水清玄の『櫻姫』菅原の車曳の『櫻丸』楠公父子の訣別『櫻井の驛』あるひは新派の〃己ケ罪〃の『櫻戸子爵』また新劇ではアントン・チエホフの傑作で、最近新築地劇團によつて演ぜられた『櫻の園』もある、このほかまだ〳〵櫻に因んだ狂言や役名があるし、いろ〳〵分類して調べて見るのも興があらう。

寸感

女清玄

中山楠雄

大南北作る隅田川花御所染——第一番目三建目淺草新清水花見の場、香蝶樓國貞描くこの舞臺面の錦繪に、私は爛漫たる江戸の櫻を、そしてその幕切れに、惣太が清玄尼に搦んで傘の立廻り、花道で花帽子が取れて靑坊主になり、柄の取れた傘を被つて向ふへ入る清玄尼に、しみ〴〵春の女を思ふのである。

春芝居幻想

西尾福三郎

春だ踊りだ、踊りだ春だ。

さなきだに心浮き立つ爛漫の春を、彌が上にも華やかに謳歌するやうなこのスローガンに驅り立てられる迄もなく、春の芝居と云へば誰でも眞つ先きにあの綺麗びやかにも眼眩めかしい豪華な歌舞伎の所作事の舞臺を思ひ描くであらう。

春の芝居を語るとなれば、先づ第一に賑やかな踊りの場面を想像するのが當然である。

春は所作事、夏は水藝、秋世話物に冬金襖と、これは、それ〴〵の季題に尤も恰はしい芝居の內容を簡單に云ひ表はし得た面白い言葉だと思ふ。

所で扨て春向きの所作事はと云ふ事になると、とても種類が多くて仲々簡單に語れさうにもない。

中で尤も春らしい踊りと云ふ事になると、十人が十人先づ京鹿子娘道成寺を第一に擧げるだらうと思ふ。事程左樣にこの一曲は舞臺上の色彩と、音曲の節調と、そして詞章の總てに亘つて瑰麗なる春そのものを餘す所なく表現し得てゐて申し分がないのである。

全體に春らしく長閑な節調の中でも、とり別け鐘づくしの條りなぞ、いつきいても靉靆たる春霞の中から湧いて出る黃色調とやらの古鐘の響きをそのまゝ文字に形容したやうな趣があつて堪らなく好いものである。舞臺上の色彩から云つても、たつた一人の女性たる白拍子が衣裳持物をそれからそれへと次々に取かへて變化の妙を極め乍ら段々時代から世話味に碎けて行つて、最後に怪奇な魔性に一變する迄の趣向の面白さと云ひ、又全體を一貫するテーマが、赤熱した男女の戀愛が時あつて蛇性の妬慎に迄變化すると云つた所等、いかにもねつとりとしてゐて甚だ春らしいではないか。

實際どの點から云つても、娘道成寺こそは春の踊りとして筆頭第一の豪華版であらう。道理で、二人道成寺、三人道成寺、奴道成寺と云つた風に、元來が化變物だけに紛らはしい類作の多い事もこれが恐らく第一だらう。

娘道成寺を爛春の踊りの王座とするならば、それに先立つ早春の踊りとして私は春興鏡獅子を擧げたい。これには一見して業々しく殊更らに春を表徵する何物もないが、營中の鏡開きと云ふ春のトップの行事に取材された所に、喩えて云うなら寒梅を見るやうな魁春の引きしまつた季感があるやうに思はれる。

これについて春の踊りで私の好きなは『深山』花及兼枝振、即ち保名の所作事である。

これには櫻の外に菜種の花や胡蝶と云つたやうな景物もあつて、季題の感じはどちらかと云へば爛春よりも晩春に近い内容であり、鏡獅子の上品さ、道成寺の柔和に比して、これには物悲しいペーソスがあつて、いかにも逝く春の名殘りの氣分が巧みに出されてゐる。

以上道成寺を中心に鏡獅子と保名を兩脇立として、この三つを早爛晩の三春を代表する尤も好もしい踊りとして私は推稱したい。

尙ほこの外に、それ〳〵自分の好みの立場から春の踊りを論ずるとなれば、ずい分數多くの所作事が引用される事だらうと思ふ。

凡そ歌舞伎の舞臺に殘る所作事の中で、春、或は花を少しでも題材としない物はないと云つても敢て過言では無からう。

まことに春は踊りだ、踊りは春だの感が實に深い。

一つ來年の春の踊りには、南北さんに考案を煩はして、歌舞伎花舞臺全集と云つたやうな春の所作事オンパレードを案出して貰つては如何？　いや眼先きの早い松竹の事だから既にすでに考案濟みの筈かも知れないが……

扨て本題に戻つて、お次は春を扱つた所作事でない、本當の芝居と云ふ事になると、まことに汗牛充棟とやらでその一つを取扱つてもちよつとやそつとで片附きさうにないから、委しくは又の機會に讓らせて貰はう。

春芝居の代表としては義經千本櫻があり、その他、一場づゝ取上げて調べる段になれば、一篇の戯曲の中で相當傑出してゐる部分は大抵春を扱つた場面に多い事に氣がつくであらう。と云ふよりも、何でもかでも、ともかく春の世界へもつてきて、ごちや〳〵と並べさへすれば何うにか見られる芝居になると云ふ事になつてゐるのだ。

春と芝居の心理學的關係と云ふ事になつてくると、とかく問題がうるさくなつてきて春向きでなくなるので面白くない。

で、要するに、世は春だ。春は踊りだ、踊りは春だ、と云ふ事でこの春興隨筆を擱く事にしやう。

御觀劇には特に

新發賣　鶏せんべい　を

御推奬申します

瓢亭食品

優美罐入　送料共　一、二〇

明治初期故優追憶

高安吸江

故人になつた役者の話をせよと云ふのですが。イヤ私もどうやらそれ程の年輩になつたと見えます。よく古老から昔の話を聞くと、誰も彼もが皆名人で、今生きてをる役者は到底その足元へも近寄れぬと、頭からケナしつけられるのが普通です。此事は時代の推移とともに多少眞實性がないでもないけれど、此等の昔人は特別上等の料理を自分等だけ味ひ得たその特權を誇としやうとする傾向が多く又死んだ婦人がいつも美人と新聞に書かれるのと同じやうな氣持からツィそうなるのかも知れません。

それで私は三十餘年以前に見物した團十郎や菊五郎(五代目)の演技に對しても其時と全く同樣の感激が得られるか、若し出來る事なら當時その儘を現在の氣持でもう一度見直したいものと常々思つてゐます。唯今故人を語るに就ても、成可冷靜に眞實を捉へ、右に述た古老と同じ弊を繰返さない樣注意するつもりです。

私の見た古い役者では先づ明治十九年三月に死んだ尾上多見藏を擧げねばなりません。彼は當時九十歲と稱してゐましたが、寬政十一己未歲生れの八十七歲といふのがほんとうらしい。何れにしても其高齡で五右衛門の宙釣などをやつて人氣を博してゐたのですが、當時まだ幼なかつた私には判然たる印象も殘つてゐず十八年の正月戎座(浪花座)でやつた一世一代の扇屋熊谷など、芝居好きであつた私の父が見に行かぬ筈はなく、行けば必ず私も御相伴したと思ふのに、まるで覺えてゐないのは不思議です。

同年冬に改築された中の芝居の舞臺披きに、橘三郎、右團次(齋入)の尉と姥で阿蘇友成、實は歲德神の所作がすんで幕になると、男衆達に抱えられて舞臺から引込むヨボ〳〵しに老體、それが嘗ては

膽玉と呼ばれた此名物男の、私には唯一とも云ふべき記憶でした。

明治期に於ける上方の二名優は云ふまでもなく中村宗十郎と實川延若（先代）ですが、此河内家についても私は多く語り得ないのを遺憾に思ひます。

彼は老優多見藏より一年前の十八年に圓熟期の眞最中、五十五歳を一期として亡くなりましたが、角の芝居のハテ太皷と古手屋八郎兵衛で斷腸の表現が絶妙だつたのは、常々母から聞かされるばかり私には唯コツテリとして艶やかな梅暦の丹次郎、潤ひのある立派な安倍の貞任等がポンヤリ頭に浮ぶ位のものです。あの宗十郎の袖萩が花道から落ちても盲の心持を失はなかつたので皆が敬服したのが此安達原です。

十八年の秋に朝日新聞の續きもの三枝譚といふのが上演され、其主役を延若がする筈でしたが、とう〳〵立てなかつたので橘三郎が代りました。何でも忠實な農民が大詰で武士に取立てられ、自信もなく刀を振ると悪人が斬れる處など、滋味に富んだ河内家が生てゐたらと人が皆惜しみましたが、私もそれを聞いて小供心に同感と思ふたのでした。

序に申ますが、同優は浪華橋北詰の高橋病院で逝くなつたと傳へられ、又書物にもそう載つてありますがそれは誤で實際は危篤になつた時、どうせ助からぬのなら自宅で死にたいと云て退院し、其後同人の希望で其最後まで私の父が日々往診したのです。

今一人の名優末廣家中村宗十郎は延若に比べて遙に進取的の人でしたから、從て關西の劇發達につき多大の貢献をした筈であるが、眞に其實力を理解してゐた人は當時割に少かつたやうです。

私の父は宇田川文海翁などゝ共に大の末廣家フアンであつた事は、後年翁の消息で知りましたが、そのせいか或は宗十郎が河内家よりも數年長生した爲か、とにかく私が末廣家からかなり深い印象を得たのは事實で、先に云つた袖萩やその前の大案寺堤などの記憶は極微かであつても、十八年の春に彼が東京の新富座で鎌倉山を出し、また團十郎と衝突して歸阪してからの役々は大抵覺えてゐます。

今それ等の一々を詳しくお話するわけには參り兼ねますが、その一二について云へば、大藏郷の質阿呆、上品で和らかな味のある中に何處かキツトした處が隱されてゐる妙味、大盧平八郎などは持前の癇癪がきいたか一層それらしく、或は當り役の由良之助よりは適つてゐたらうと今日から推測される位でした。

栗山大膳や吉備大臣も亦同様によく、盛綱に源藏、鎌腹の彌作に男重の井の新左衛門が好評だつたのは無論のことですふけ役では鬼一法眼に釣船の三婦、それから面白かつたのは道明寺の覚壽で、上品なお婆さん、情もあり涙もあり、理屈も云へば強氣でもあるといふ難役も彼は

わけなく演てのける、が併しそれも時には藥がきゝ過ぎ、杖折檻で右團次（齋入）の承相が聲をかける、其間が後れたと、杖ふり上げたまゝ上手の障子の方へ『氣附けイ、ド阿呆』と聲高にどなつたのを聞いて私は吃驚した事がありました。

新物では月照上人に仲國、此話歴の失敗はあまりに有名ですから略するとして肥後の駒下駄の中川縫之助、名高い鳩治郎の出世狂言も此人の此役あればこそで例の婚禮の場なし呼吸もつげぬ面白さといふのは此事でした。

それに少し前になるが錢世中の紀の國屋傳次郎、此れは琥珀郎の桝屋五兵衛に思ふ存分惡をきかせるやうに演じさせ、自分は唯それを受けながら、見物をグン〳〵と引付けて行くやり方です。

此芝居は日本最初の沙翁飜案劇で、其藝術的價値は別として我邦の演劇史上に特筆されるべきものですから其大要をお話しましやう。

元來は朝日新聞の續きものとして宇田川文海翁が執筆したのですが、此材料を何所から探出したのか聞洩らしました。やはり芝居仕立にして連載され中々好評であつたのを竹紫諺藏が脚色して六幕十場にし、外題に何櫻彼櫻錢世中、新聞六號、角書には趣向は沙古比阿の肉一斤文章は柳亭種彦の畫本製とあります。

一、傳法村三味の場
二、天滿天神境内の場
同裏手龜の池藤花盛の場
三、老松町桝屋五兵衛内一斤抵當の場
四、金銀鐵箱當物の場
中川家裏手の場
五、桝檀木橋お梅殺の場
山崎の鼻捕物の場
六、町會所の場
奉行屋敷白洲の場

といふ場割で、荒筋を云ふと、中川家の跡取、お榮の婿にならうとする二人の塾生、青木、川嶋の中、善良でお榮とも相思である青木はそれに必要な持參金三百兩の調達を知人紀の國屋傳次郎に賴むと傳次郎は近く入港する我が持船の朝日丸をアテにして用立てやらうと約束をします。

所が高歩貸の桝屋五兵衛は惡者を唆かして朝日丸難破と僞り、其積荷を賣拂はせたので、傳次郎は已むを得ず、胸三寸を抵當に三百兩を五兵衛から借ります。

中川家では金銀鐵の箱に遺言書か何か貴重書類を入れて候補者の青木、川嶋兩人に推定させ、青木の方が當つて首尾よく相續人になれました。

然し傳次郎の方は期限が來ても拂へぬので裁判となり、興力の川嶋は戀の意恨もあり旁、五兵衛の味方をして胸三寸を與へるやう判決しやうとする時、先代萩もどきで同役の水木平十郎が出て更めて裁判をやり直し、都合のついた三百兩で納得させやうとしても聞かばこそ、とう〳〵短刀をかざして今や胸を裂かうとす

る、其刹那に書入れがないから一滴たりとも血を出すなときめつけられ、流石の五兵衛も閉口して終に金を受取つて證文を返へすと、今度は舊惡の教唆一件がバレて縛につくので幕。

琥珀郎の五兵衛はシャイロック、宗十郎の傳次郎はアントニオ、壽三郎(先代)のお榮はポーシアですが、裁判は橘三郎の水木平十郎がやります。お榮が若衆姿の男裝で青木を驚かす處があつた樣にも思ひますが、詳しい事は忘れました。尤も原作にある裁判後の戀の喜劇はありません。

戀人の許へ馳つたシャイロックの娘の代りにお梅といふのがあります。此れは五兵衛の喰いものにならうとするのをお榮に助けられますが、後に傳次郎に入用な三百兩を持て行く途中で殺されやうとします。

其場は清元の鴈金などを使つて飜案劇も中々粋なものです。

金銀の箱は原作の面影があつて朗かですが、何と云つても山は胸三寸で、秤をカチャつかせ小刀を振つて股の肉を要求する原作より、泰然として廣げた胸へグツト刀をつきつけた瞬間の物凄きは、無論兩優の妙技によるのではあらうが、遙に印象的なものでありました。

さはれ此芝居は非常な好評で我家の女中達なども其後長い間、胸三寸を口癖のやうに云ひ出しては面白がつてゐたのを見ても其一端がわかるでしやう。

宗十郎はあまり大きい男でなく、顏は稍長いのですが、頰は豊と云ひ難いし、無論美男ではありませんでした。寫眞嫌ひで唯馬切の信孝だけしか撮らず、他のは首だけ馬切の時のを用る胴以下は畵を寫眞にしたもの、現に私が藏してゐる道風などがそれです。何故寫眞が嫌だつたかといふに、彼の右眼に缺點があつた爲だとか鴈治郎が話してゐました。しかし私共が實地に其舞臺を見てゐますと、そうした彼の容貌の細微な點や、殊にそんな缺點が少しも眼にとまらず、いつも品格のある和やかで丸味のある中に三分の堅さがあり、時にはそれが非常に鋭いものとして瞬間的にあらはれることもあるといふ風な彼の藝に魅せられてしまふのです。まだ〳〵此人の事は此位では云ひ盡せませんが、一ト先づ此れで切り上げます。

『道頓堀』

年極讀者優待

一ヶ年……三圓三十錢

(送料共)

一冊……三十錢

投書募集

本誌には「俳句」「川柳」「漫畵」「似顏」「舞臺スケッチ」その他誌友クラブ或ひは愛讀者諸氏の投稿の頁がありますから、三三頁の規定を御覽の上、どしどし御投稿下さい。

編輯部は皆樣の御投稿を歡迎して居ります。

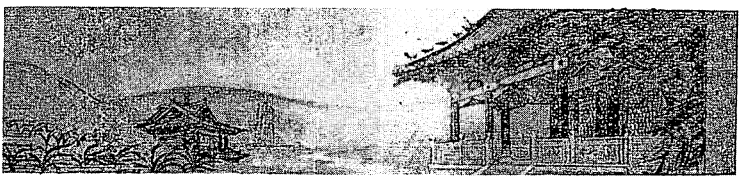
旅で拾つた話

長島丸子

御紙に掲ぐる様なお話ではありませんが、十年ばかり前の事でございました。

その頃まだ澤田先生もおゐでになりまして金澤へまいりました時、乘打初日で私共は疲れておりましたが宿へ歸へりましてから皆さんとお話したりなどして床に就きました。

すると夜中の三時頃と思はれる頃、ふと目が覺めますと何とも云えぬ嫌やな氣持ではツと思ふうちに、ツマ先から鐵か何かで壓えられた樣に頸のところまで腕で一ツ動せず、その時の苦しさ、氣持ばかり焦つて神經がハツキリしてゐて軀が一分も動かせず聲も出ません。どうなる事かと思つてる中にスツと軀が輕くなりましたので、嬉れしいと思ふ內にまた……そんな事が二三回くり返へされました、私はもう生きた心地もなく汗で軀はびツしよりでございました。そうした中でも、此度輕くなつたら飛び起きてしまほうと、待ちかまえて、やつと自分の軀になれましたがもう眠むる事も出來ませんので蒲團を引ずつて、場所を變へてやすむ事にしました。その時蚊帳越しに何か白いものが動いてをりますので私はもう聲も出ませんでした。驚いた時には髮の毛が立つと申しますがあんな時の事を申すのかと思ひました。ところがその白いものが、私の枕許へまゐりまし



南地名妓の顏横

北川康男

××南地の現役第一級に屬すべき若手の第一線闘士の活躍で今年の『あしべ踊』は熱と一杯の努力で各員が所謂ハリキリ方で人氣を呼んでゐる。先づその人々を此處にあげてそのプロフヰールを記してみよう。

・はん・

舊大和屋の秘藏つ兒で、有名な藝熱心な妓、何時迄も變らぬ若さとあどけなさはこの妓のもつそれは强みで、押しも押されもせぬ南の第一人者。

・筑波・

映畫から舞臺へ、そして又元の左樓へと鮮かな三段とびの轉身ぶりである、流石に昔とつた杵柄は爭へなく、別踊のかしくは先づこの妓にとゞめをさすとか。

・千代子・

人氣者千代ちやんは今度は『だんまり』の牛若と『かしく』の妹お園で活躍して

て『丸ちやんお冷ないッ』と口を利かれたので二度びつくりすると『どうしたの今頃起きて！』とまたもや言葉をかけます。よく〳〵心を落着けて見れば、それは私の前の部屋にゐるKさんでした。こんな嬉しい事はなく早速その方の床の中にもぐり込んで一緒に寢させて頂きました。後で聞きましたが梁の眞下にやすんで、その上にネズミか猫が通る場合にそうした事があると云ふ事です。とても恐くてそう簡單には考へられません、春がきて夏が近くなると何日もその事を思ひ出します。それと同じに私の目にゆうれいの様に見えた今は亡き上山珊瑚（上山草人氏の義妹）さんを想ひ出されます。

京都の憶ひで

青山圭男

自分の作つたものが京都で上演されたことはTSSKとOSSKによつて度々あるのだが、當時、私自身京都にゐたことは只一度より無い、それは東西松竹少女歌劇の母體とも云ふべき樂劇部の創立披露舞踊會の時である。ショパンのプレツユードやシューベルトの未完成交響樂等が、大西利夫氏の挨拶後で次々踊り展げられていつた感激は今以て忘れ得ぬものである。

――ものゝ端くれに過ぎなかつた自分でさへこの通りだつたから主腦部の松竹の人達の喜びは營利を離れたものがあつたに違ゐます。先年の溫習會で踊つた『文屋』の巧さがまだ殘るちよちやん。

・若　次・

こぼるゝ愛嬌と、あの情味たつぷりの瞳『荻の場』のおきさの情艶さは他の人で味へぬよさがあります。この妓の將來こそ大いに刮目したいと思はれます。

・すみれ・

大和屋出身の若手の中でも、今ではもうすつかりとお姉さんになつてゐます。確かりした藝はよりみがかれて、段々巾が出來た事は見逃せません。

・小つる・

南地の代表的な美人で、柳より可弱い藤の糸房と云つた感じをもたせる、今度は『雪』の一代女と鳴物に出演してゐますが、一代女の艶麗、繪の如き美しさ!!

・秀　菊・

この人の再現に、南の夜は一層明るくなつた感じがします、

大和屋養成所出身の若手美人、舞臺にもつ魅力がいかにもナイイヴである。

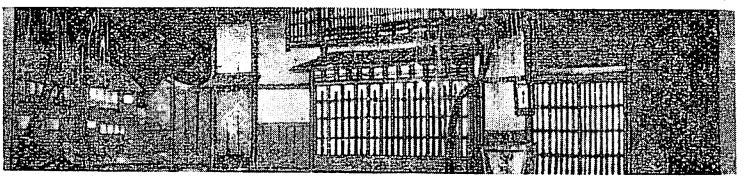
ひない。

TSSKが、京都で大歡迎を受けた便りは旅行中屢々貰つたが、遠く想像するだけで喜びを直接身に感じた事が出來なかつたが昨年はじめてTSSKの關西公演に同行して、その熱烈さに度膽を抜かれて了つた。

今度もきつとさうだらうが、私としては第二回目の京都行きなのだから、總てが嬉しさで一杯だ。

第一回目に京都へ行つた頃の友達である松本四良氏や飛鳥明子氏等に京都へ來て貰つて當時を偲ぶ會を、京都の京都らしい場所で開きたいと思つてゐる。そして曾遊の地を新しい感激で以て歩きたいと思つてゐる。

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇
南地ホテル
一宿 三圓 額 一半
二圓半 愁
南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一



・ぶ　ん・

その貫錄、藝、今更喋々を要しません南地に代表的な存在で今度の『だんまり』の大百なぞまづこの人を何と云つても第一位に押さねばなりません。

・ぼ　た　ん・

花にもまがうそのかんばせ、正に名花とはこの妓をさしてこそ云ひはめる言葉でしよう、

すんなりとした艶姿、『雪』の一代女は傑作中の傑作。

・そ　め　丸・

今ではもうすつかり南地の立として押しも押されもせぬ一流つ妓、

あつさりとした氣風はその藝の上にも現はれて、壯快な舞は『だんまり』の落人にみられる。

× × ×

× ×

讀者欄

泉南郡　林ゆ紀子

此の間、二流所の田舍新聞ではありますが、演藝欄に「禿を踊る芳子」云々と題して然かも御丁寧に、二三度まで平假名で大きく「はげ」と書いてありました。これを見て吹き出すよりも先づ、暫くは唖然とならざるを得ませんでした。たとへ田舍新聞とは云へ、やはり天下の報道機關です。假初にも演藝欄を擔當する記者が「禿」の讀み方を知らないとは……

私の如き黄吻兒がこんな事を言ふのは甚だ僭越ではありますが、近頃歌舞伎方面に用ひられる極く簡單な日常語でも、中々解らない人が多くなりました。こんな事からだん〳〵歌舞伎が大衆より離れてゆくのではないでせうか。

所で歌舞伎日常語なんてものは誰もが皆知つてゐる譯でもなし、一寸わからない時など困る事がしば〳〵御座ゐます。本誌など斯る初心者をも育てゝゆく意味に於て、時々は懇切な御指導をお願ひ致します。

◇投稿規定◇

○俳句　「春季雜吟」　日比煤葉選
★投稿所　大阪市西成區粉濱中ノ町一ノ二〇

○川柳　「春季雜詠」　田中牛耳樓選
★投稿所　編輯部　川柳係宛

以上締切　毎月二十日　用紙　ハガキ

○漫談・似顔・舞臺スケッチ・カット
締切　毎月二十二日　用紙　畫紙　投稿所　編輯部池尻宛

○讀者通信　演劇、映畫、レヴューに關して皆樣が云ひ度いこと、讀者より讀者への言葉などで、本欄は讀者への開放欄です。
締切　毎月二十五日、用紙　十五字詰原稿用紙
投稿所　編輯部池尻宛

○誌友クラブ　本誌を中心として讀者と劇壇の方々との親睦を計る意味と演劇映畫研究の特殊機關です、會費は無料
申込所　編輯部誌友クラブ宛

◎御注意　投稿用紙には必らず住所氏名明記のこと

洋酒・食料品　罐詰問屋

株式會社　横山商店

大阪市東區豐後町三番地
電話東94代表三八六五番
振替口座大阪二八四七番

創業明治五年

三月觀劇日誌

大橋孝一郎

◆南　座（五郎劇）

五郎の持つ世界は、昔から常識的道德の器に盛られた人情の縺れに限つてゐる。而も、この『常識的な道德』は、まだ〳〵僕達の意識の底に執拗に根を張つてゐると云ふ怪物である。今更それを振廻されると鼻持ならぬ臭みを覺えつゝも、或る程度の共感は呼ぶから不思議である。殊に五郎劇にあつては此の臭みが、却つて五郎劇の根本的な特質となつてゐるのは面白い。これは五郎の藝風にのみ許された特異性で、或る點、歌舞伎と酷似してゐる。

尤も五郎の演出も、外面的に甚だしき歌舞伎調で、今度の出しものでは四番目の『情の雪解』が呼び物になつてゐるがこれなぞは歌舞伎劇とさしたる大差がない。癈嫡した悴への愛情を五百圓の金子に絡ませて浮彫する五郎の老母役は流石に老巧、二場目に入つて愈々冴ゆる熱技を示した。この場面に清淨な神社の雪景を配したことも情景を美しく引立てたし桃蝶の清艶と二三蠅の純朴な神妙さとが目に殘る。

『槍踊』は頑固一徹な老臣と才智に秀でた佑筆を犬猿の友に仕立てゝ、五郎と大磯とが競演するのが面白く、老臣に扮する五郎の臭氣紛々たる打込みに對して、大磯の扮する佑筆が澁味ある好技で受合つて行く對照の妙が、この劇の興味の中心となつてゐる。だがそれにも地して、非常時を忘れた泰平の人々の姿が、雰圍氣が、僕達には、限りなき羨望であつた。

他に『若き妻』『宿り木』『上と下』の三狂言があり、五郎には後の四狂言出ッぱりの點力的な熱演に敬意を表するが、良き女房役大磯の、愈々この劇團に缺くべからざる人材となつたことを、此の期に深く痛感した。（三月一日觀劇）

◆中　座（東西合同歌舞伎）

こゝは魁車、壽三郎に猿之助と宗十郎とを加へた珍らしい顔合せで、出しものも久々の『天下茶屋』が呼びものにされてゐるが、觀終つてからの印象は『春雷』に一等好感が持てる。これは新人鄕田憙が世に問ふ第二作だが前作の『朧夜の夢』から遙かに一日の長を示してゐることが第一に心强い。殊に第一幕で此の狂言の重點たる、お才の心理轉換の件りは魁車のねばりのある腕達者な藝と、猿之助の淡彩な藝とに埃つて、中々面白い芝居を見せた。然し第二幕目の三四郎の登

場以後の劇の進展と人の出入りに餘裕に缺けた個處があるせいか、幕切れに舞臺を廻した効果の稀薄だつたことは怨まれる。魁車のお才は此の人最近での傑作品。上方狂言で顔合せをする猿之助が故意か偶然か山出し男に廻つて方言のギヤツプから逃げてゐたのも思ひ付きだつた。

『三番叟』は猿之助親子が、こゝを千度と踊りまくるが、顔見世で數回見たにも拘らず矢張り面白い感銘を受けた。翁には幸四郎に更つて宗十郎が勤めてゐたが、堂々たる風格では幸四郎の敵ではなからう。

面白さうで、それでゐて案外面白くなかつたのが『天下茶屋』の元右衛門だ。猿之助の元右衛門は浪宅で、色々變つた工夫を見せたり、寫實の藝で苦心をしてゐるが、酬ひらるゝところが尠い。お愛嬌のある惡人、一盃の酒でどうにでも變節する臆病な惡人は、あながち元右衛門一人には限るまい。元右衛門も現在では諷刺的な役目をさへ果してゐると云つてよろしい。返り討の場は歌舞伎の一ツのサンプルとして意義があらう。大詰は全然『研辰』式だが、研辰の方が數等内容があつて面白い。一體に仇討狂言の大詰ほど下らなく出來てゐるものはない。(三月一七日觀劇)

◆歌舞伎座　(新派大合同)

河合・喜多村・井上・花柳と新派の巨頭が殆ど顔を揃へながら、顔を合せる舞臺が一つもない。各自が自分の出し物に閉籠つて、それ〴〵鎬を削つてゐるのが、記念興行だけに皮肉に見えた。

『白痴の死』は花柳が濃艶な白痴美を見せるが、まだ〴〵舞臺に立卓める妖性な體臭が足りない樣だ。此の作者は此の脚本からもつとアブノーマルな空氣を要求してゐるのではないだらうか。

『淺草寺境内』は柴崎と泉藏院とお柳との關係が說明不足で、二幕目の見世先の場など可成り難解な節が多い。此の芝居では徹頭徹尾河合の淸艶な至藝に陶醉すべきで、河合の一擧一動のみが燦然と浮上つて輝いて見える。例へば第一幕目の柴崎に出合つてからの芝居、また三幕目の醉體から殺しに至る段取り等は實に鮮かで、此の人の健在は充分讃えられてよい。

『眞實一路』は井上の中間演劇ものだがテーマが恐ろしく新派悲劇である。脚色、演出等の裝幀が新らしいので、これは昭和版の新派悲劇と云つてよからう。村上氏の演出は例に依つて新劇的な演出や、映畫的な演出で、井上のあくどさを救つてゐるが、何しろテーマが新派悲劇の域を出ないので、氏の仕事にも張合ひがなからう。然し第二幕目の海岸の場なぞは、淸澄な感じの舞臺裝置を得て各優がたつぷり芝居を見せた。些細なことだがハモニカを吹く曲目ラヴ・イン・アイドルネスだつたが、濱の子供にしてはハイカラに過ぎて氣が咎めた。俳優では山口の畫家が儲け役だし、來阪各に追々と進境を見せて來るのが賴もしい。

敢て歌舞伎の狂言立てを眞似ねた譯でもなからうが、『婦系圖』の湯島の境内だけが獨立して上演される。そしてこれ

が喜多村の出しものとなつてゐるが、老ひたりと雖も喜多村である。今度の記念興行では此の幕が一等印象深い。喜多村のお蔦には未だ〳〵色氣は充分あつて、内から泌み出る藝の巧さと、趣きのある姿態の動きは感歎ものだ。新派の代表的な型ものとして、將來保存さるべき一幕であらう。

（三月十六日觀劇）

× × ×

劇場建築專門並ニ
一般建築設計施工
池上建築工務所
事務所　東區京橋二丁目四八京阪ビル
電話東七二三一番
自宅　市外布施町菱屋西二七番
電話小坂五六八番

◇テシト「ートツモ」ヲ價安・實確・速迅◇

劇場
演舞場　裝飾

營業品目

店頭裝飾　徽章
室内裝飾　造花
町内飾付　久壽玉
催物・裝飾　花環
花簪

各意匠、裝飾、考案調製致シマス

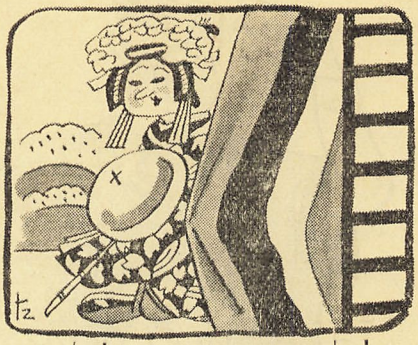
TRADE MARK

上村商店

大阪東區南久寶寺町三丁目
電話船場(83)一〇七〇番・振替口座大阪二二〇七番

船場一〇七〇番ヘゼヒ御電話ヲ……

ボクシング



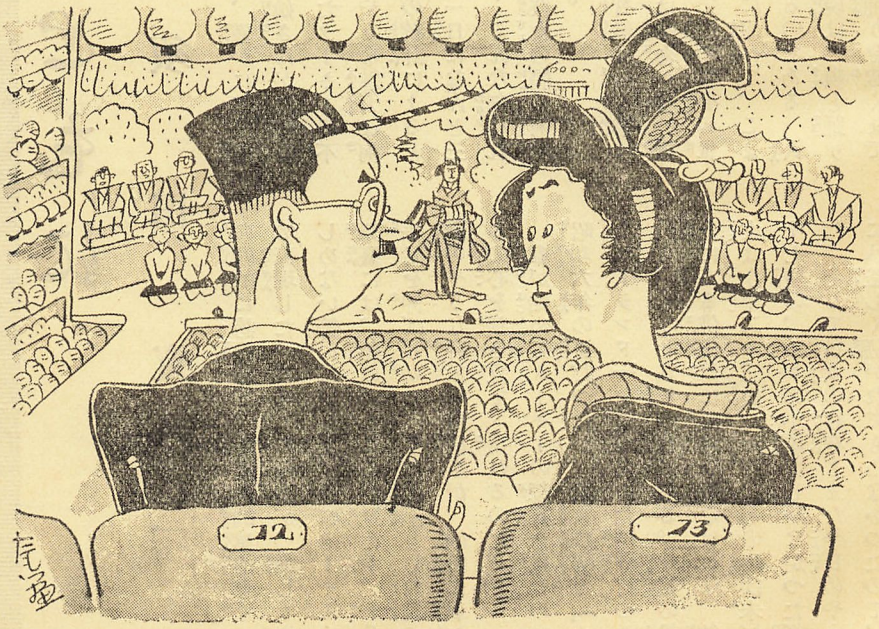
女・櫻・芝居

大槻たもつ作畫

この月は一つ斯んな題でせい〳〵陽氣な漫文をかけと云ふ編輯部からの註文、云はれなくつても出された題だけで既に陽氣になりさうです。さくら、陽氣で好き、お芝居も大變お陽氣で大好き、女も……こゝのところ、編輯部で〇〇の伏字にしられないうちに氣を利かして一寸遠慮しておきます。ところでこの三つの單語を兼ね備へたもの、つまり、美人の女……勿論われ〳〵男はいくら美しくても美人とは云ひませんが、が出て櫻が咲きみだれて陽氣なお芝居と云ひますとまづ、千本櫻の道行か娘道成寺てなところでまことにもつて華々しき限りで御座います。何もたまの日曜を眞白にほこりを浴びて、滿員電車にもまれ、櫻を見に行つたのか砂ぼこりを吸ひに行つたのか將又、女房の耳の後に白粉のはげた個所を發見してつく〳〵悲哀を感じに行つたのかさつぱり見當がつかんと云ふ樣なお花見よりも斯う云ふお芝居でも觀てうつとりした氣分に浸つてゐる方が數等勝つてゐるやうに思はれます。亭主も細君もお互に好いんです。つまりネ、二人並んで靜御前の一擧手一投足、白拍子花子孃のさす手引く手にとろり見惚れてゐる間に『アラ、この人の眼の色の變り樣つたら、いやあだ、心臟迄高鳴らせてるワ』『おや〳〵女房の奴の熱つぽい眼、アレ〳〵膝を乘り出して、ハンカチを握りしめて……蓄生ッ』お互にがらにもない嫉妬やいて『こりや斯うしちや居られない』と云ふことになる。そして何ちらも思ひもよらぬことなんだから、まあ歸へりには天婦羅で

も喰て歸らうかと云ふ樣な結果になつて至極よろしい樣です。

明日の日曜は櫻も見頃、一つ花見にでも出掛けるかなゝどゝ一言でも滑らすともう細君は無我夢中です。平素のくすぶりに光輝あらしめるは今日の日ぞと前の晩から錢湯へ行つて、玉みがかざれば光なしとばかりに、コールドクリームをすりこみます。櫻は日本の花、頭も矢張り丸髷が似合ふでせうと飛んだところで國粹主義を發揮して、お辨當はおすしと果物、水筒にお茶つめてと對櫻戰時準備おさ〳〵おこたりなく地球の廻轉や遲しと待機の姿勢をとります。一夜明くれば日曜日、ところが憎や雨模樣、ラヂオが聲を出して曰く、『本日は午前中曇り小雨午後からは本降りとなる模樣です』とたんに亭主は左程でもありませんが細君は悲嘆その極に達して春や春、春や昔の春ならでと、亭主とラヂオが合資で雨を降らせた樣に、恨み悲しみます。女の愚痴は御承知の如く綿々として長い。亭主いつもこりてますから『仕方がないヨ。芝居でも見に行かうヨ』トタンに愚痴の尾が切れて『まあ嬉しいツ、アナタぢや洋髪に』『おい〳〵千本櫻ぢや、靜御前がいやがるぜ』『ぢや、矢張りこのまゝで、で貴方も』『當り前さ、お供するヨ。飛んだ狐忠信だ』『アラツいやあだ、妾そんなに見えて？』この細君、自身を靜御前に見立てゝの有頂天振り、今日の天氣と反對に雨後晴れのお陽氣さです。ご註文にはあてはまらないかも存じませんが此處らで區切りもよろしい樣で、失敬。



ターキー花とともに

須田寛二

ちかごろの娘さんはどうかしてゐらつしやる。ターキーと云つたゞけ、たゞそれだけでも顔色をかへてゐらつしやる。これは全くたゞごとぢやアない。誰も彼れもが、云ひ合せたやうにターキー病に取憑れてゐらつしやるのだ。毎年お正月には定つて來演するターキーが、どう云ふものか今年に限つて大阪で開演して終つたので、京都の娘さんがたの御氣嫌の惡かつたこと！その浮ばない娘さんがたの心を一瞬にしてフツ飛ばさんとする素晴らしい意氣に燃えたターキー京都來演の音ずれ……さア娘さんがたの心は早鐘を打つやうに、嬉しさのために戰いて、京の街々には、大騒ぎがボツ始まりさうな氣配が仄見える。

『タンゴローザ』以來、僅かに二三回の來演で、オール京阪の娘さんがたの心をスツカり喰盡して了つたターキーの不可思議な、まるで魔藥のやうな魅力は何處から來る……ある雜誌の統計によるとターキーのプロマイドが一日になんと三千枚賣れるんだそうな……そんな割切れない不可怪な魅力が一體彼女の體の何處に潜んでゐるのだらうか。

私はレビューに對する智識は全く零にも等しいが、他の舞臺では味合へない柵のない若々しさが、まるで違つた夢の世界に生きてゞもゐるやうに思へて、こよなく私を樂しませて呉れるのである。人間の嬉しさの本能的な表現は、唄と踊りだと云ふから、その唄と踊りを飽くまで刺戟的に誇張して、而も美的感情を盛つて表現したレビューの舞臺が、誰しも樂しめない筈がなからう。殊にターキーの舞臺には、萎けたところが見えず、充分手足を伸ばし切つてゐる潑溂とした瀧つ瀬のやうな奔放な自由さが、餘計に私たちの心を搔き立てゝ呉れるのだ。

私が始めてターキーの舞臺を見たのは昭和六年の夏だつたか、東京劇場で『ウーピーランド』を演つてゐた時分だつたから、もう七八年の昔になる。今私の机上にある俳優錄に間違ひがなければ、彼女は今年二十三歳だから、その時は未だ十七歳の、ホンの小娘でしかなかつた譯だ。そして彼女の存在もまだ今日のやうに八釜しく騒がれてもゐなかつたので、

新版 探偵の人間

此の時に見た私の印象は極めて稀薄なものであつた。それから三年目に、大阪最初の來演で『タンゴローザ』に、藝と姿態共に別人の如く成人した彼女の舞臺に接して、スツカリ驚嘆して終つたことであつた。彼女の持つユニウクなパーソナリティが舞臺全幅的に覆ひかぶさつて、ひた押しに押しに押迫つて來る。

爾來私は來演ごとに彼女の舞臺は見逃さないが、特に感銘の深かつたのは、昨夏大阪で上演された青山圭男氏の『忘れな草』で、これは從來のレビューには見られなかつた高踏的な調子を持つた作品で、一ツの舞踏を切離して觀賞しても、立派に藝術的な内容を具へた逸品であつた。今春上演の『オペラハツト』では果して如何な粉飾を凝らして、彼女たちは相まみえんとするのだらうか。

京都の春はターキーの來演で、また一入の光彩と、賑はひを添へることであらう。せい一パイの聲援も、あながち娘さんばかりではない。近頃では舞妓さんまでが一生懸命百八十度ののぼせ方だ。

『ワテこないだの時は九へん大阪まで見に行つた』と御座敷で自慢顔に御吹聽遊ばす。春・花もよし、ターキーもよしターキーよ、花とともにあれ！

ルーフルリプイエ

四月馬鹿

これは若い！

①魁車さん曰く

『古い寫眞引ッぱり出してやはりましたなア。若い時はえゝ男だッしやろ、今でもえゝ男やけど……フフフフ……左様二十位の時だつしやろなア……』

②梅玉さん曰く

『私は十一の時から五年間東京で暮しまして十六七の頃、京都の祇園館の落成した時に歸阪致しましたが、この寫眞はそれから二三日してから撮つたものやと思ひます』

③延若さん曰く

『何や古い寫寫やなア……餘りこんなん人に見せんと置いとくなはれや、私の素顏どうです。昔はこんなに痩せてましたんや、え？何？今の悴に似てますか？ハツ〳〵〳〵……爭へんもんやなア……』

④『こら芝居の扮裝やおまへんで、ほんまに兵隊に行つた時に撮つた寫眞、私にもこんな時代があつたんですなア……こらうつかり非常時忘れられまへんわ』

⑤『可愛らしおツしやろ…私の女形…都踊りをやつた時です。今こんな女形になつたらどうですしやろ…何？シカ芝居に廻つて貰ふて…無茶やなア…貴方もお口が悪いなア……』

有名な洋酒肆

サントリー

ホットウイスキーは
サントリーに限る

前座日朝堀頓道

電南一六六八番

ユーモア小說

朗かな人たち●●●

河田靜

一、益田家の人々

午前六時、益田さんの家の臺所ではお米から御飯へ岐路のお釜から盛んに蒸氣の上がつてゐるころ、奥さんの眞貴子さんは香の物を切りながら毎日の癖で眠つた時間を數へてゐる。

『十二時に寢て五時に起きたら――エ、と、たつた五時間か、ア、ねむい、ねむい、もつと寢たいなア』

と、一人言ちつゝ、朝つぱらから、もう寢ることを考へてゐるし、奥の座敷では今年の春から或音樂學校へ通ひ出したお孃さんの鞠子さんがバヂャマの儘でリヅムのおけいこの眞つ最中、

『ワン、ツウ、スリー』

トン、トン、トン。

鞠子さんの傍で小學校五年生の健一君は一心不亂に本を見てゐる、と、書けば健一君たいそう勉强のようであるが、さに非ず、漫畫の本なのである。

それからやゝ經て着物に着替へた鞠子さんは今度は舞踊の振をやり出した。何んしろ始めての男舞なので中々、セリフがウマクゆかない。

『エヘン』

と咳ばらひして、

『ほんの事だが、聞いてくんねえ』

『きいてやんねえ』

『何んだ、健助』

『なんだ、マア公』

『ママ、健ちやんがいけません』

『又、健坊、はじまつたの』

形勢あやぶしと見て、健一君、いつもの逃げ道をやり出した。

『こゝは御國の何百里、離れて遠き滿洲の』

『健助大きな聲でうるさいなア、ママ、御飯まだなの』

『よう〳〵出來てよ、ガスがとても弱くて、到頭、とまつてしまつたの、困つたわ』

『ママ、大丈夫！、ガス會社へ勘定はらつたの』

『何んだか、あぶなつかしいもんだぜ』

『何んて此の人達は、大丈夫、拂つてありますよ』
『やれ〳〵、それで安心したあ』
親たちは至つて大まかなのに子供たちは至つてチヤツカリしてゐる。
或製藥會社大阪支店へ出る益田さんは東京の本店より東下りして來て間も無い元は軍人であつたが、馬が何んだか虫が好なかない、それを馬の方でも良く知つてゐて、中々、益田さんのいふことを聞かない、或る日一ばん溫和しい馬に乘せて貰つて、馬場で練習中、警笛に驚いた馬に見事ふり落された、で、マがあはぬとか何んとか云つて、隊の方を退ひてしまつて、會社勤めをし十五年、漸くイタについてきたのである。大ていの事は顏に出さないで、いつも朗かにといふ方針で、益田さんの家庭は、年中、明るく賑やかで、それは親子のようではなく、まるで友達みたいであつた。相當、益田さんはボーナスも入るようだが、中々、食道樂で、家中の者が食ひ倒して仕舞ふので、いつも赤字だらけらしい、が、至つて御一同ほがらかでゐらつしやる。

益田さんはネクタイを結びながら昨日の晝休み時間に行つた何處かの喫茶店で覺へて來た流行歌を口ずさんでゐる。それがヅボンをわたそうとした眞貴子さんの耳に入つた。
『アラ、そんな歌、どこから輸入していらつしやいました』
『一寸、覺へたんだ、トンガラカツチヤいやよ』
『いよ〳〵以つてクサイわ』
『お晝の休みだ、とんがらかつちや駄目よ』
この時分、益田さんのお母さんは神々様へお祈りする、可成、あまい夫婦の會話を、これも健一君と同樣に逃避行らしい。
『御一同神々様、家内安全——アヽ、和夫や、今日は星が惡いから、氣をつけて行くがいゝよ』
『パパさん女難の相ですわよ』
と眞貴子さん、
『有難や、稻荷大明神——アレ、和夫や午後は雨になるか知れないから、傘を持つて行つたほうがいゝよ』

この調子で、いつも家中の低氣壓は不連續線に成つて仕舞ふ。
二人の子まである我子をまだ子供だと思つてゐるお母さんは嫁の眞貴子さんを眞の子のようにして下さるので、近所の人達は眞貴さんの實母だと勘違ひしてるくらゐだ。
そこへ健一君がいきせきつて馳け込んで來た。
『ママ、帽子忘れた』
『何んだい、頭を忘れる奴があるかい』
『何んだパパこそ眼玉わすれてきたくせに』
『よけいな事をいはないで、早く學校へ行つてらつしやい』
『行つて參りまあす』
『パパさん』と眞貴子さんは云つた。
『矢張、鬼子ぢやないようですねえ』
『あつぱれ我が子ですなア』
先達つての事、眼鏡をこはしてしまつた益田さんは眼鏡を買ひに行つて眼鏡を買はずに十五センチもある擴大鏡を買つて來て仕舞つて手相ばかり見て喜んでゐたので眞貴子さんに

『御商賣替へですか』
と、ひやかされたのを、健一君、いつの間にか聞いてゐたらしい。
可成、お天氣も好いのに、
『親孝行ですよ』
と、益田さんは傘を持たせられて御出勤に及んだ。

二、サラリー・奥樣

オフイス内の午前は、まだ疲勞に汚れない空氣の中で社員達が各自に與へられた仕事にたづさはつてゐるかたはら、支店長の今日の雲行きを一樣に觀察してゐた。會社では相當落つきを見せてゐる益田さんは調べ物に熱中してゐる。
チリン〳〵、上田君の机のベルである第一番の御目見得だ。
『上田君』と支店長は云つた。
『どうも此數字で見ると、君の受持の方面は、大へん、わるいようぢや喃、他に比べて見て大分赤字だよ』
『どうも相濟みません』
チリン〳〵、佐竹君の机である。
『ホイ、おいでなすつたあ、今日は鬼門だぜ』
『佐竹君』と又支店長はいつた。
『君の此の請求書の文句は成つておらん水商賣用語とは、もつとシタデにオダヤカに書かなければいけない』
『しかし、しかしですなあ、支店長』
と佐竹君勇敢に口を切る。
『このくらゐに書きませんと、中々、回收出來ませんでして』
『君は得意先を逃がすのと、どちらが好いのか、君は』
『抗辯いたすのぢありませんが、支店長——』
と理屈張る佐竹君に支店長もタヂ〳〵と成つて、まるで世界中の苦味丁幾を一人で飲んでしまつたような、ニガイ顏である。
天氣晴朗なれども波高し、一同警戒を要す、以心傳心だ。
益田さんはノツソリと支店長室に這入つて行つた。
『佐竹君、お客樣ですよ』
と益田さんは云ひ、先づ佐竹君を出して置いて、
『時に支店長、今日は警戒警報が入つてゐますが、この暖かさでは又グラ〳〵の伴泰で支店長のダンスが拜見出來そうですなァ』
『君ひやかしては困るよ、内密々々』
それはこの春かなり大きな地震が關西を襲ふた時、支店長室へ樣子を見に行つた益田さんは、あはてゝ逃げ場を失つた支店長にパツタリ扉の前で逢つた。そして、あやつり人形のフラ〳〵ダンスよろしく、益田さんの痩軀にビール樽のように肥つた支店長を抱へこんだ。餘程、落着いてから支店長はハツと氣がついたか隱し藝を益田さんだけに見られたのだ。
『食事をやつてくる』
と支店長はいつて逃げ出すように室を出て行つた。
この分で行くと『曇後晴』になるらしい。
『益田さん、今日は、とても雲行きが惡かつたようですね』
『大分、やられたようだね』
一番先にやられた上田君も漸く朗かに成つて來た。

『佐竹君、ボーナスは一體、いつ出るのだらうね』
『出そうで出ないのが石山竹の子さ』
『益田さん、重役報酬二十割とか申してゐますが我々ヒラにはセメテ十五割くらゐの見當ですかね』
『僕は待機の姿勢でエンジンをかけるばかりなんだがね、あまり二十割をアテにして彼女なんて者をこしらへるなよ』
『時に益田さん、今日はサラリー・デーなのですが、奥様はお出でがないのですか』
『めづらしく忘れてゐるらしい、無事通過、一緒に飯でも食ひに行こうか』
と立ちかけた。と、
『益田さん奥様からお電話です』
『ソレお出でなすつた』
『モシ〳〵、益田さんでいらつしやいますか』
『さうです』
『ほんたうに益田さんですね』
『全くの益田ですよ、いやに御念が入りますな』
『でも、お晝の時間だ、忘れちやいやよに、いらしやつてお留守かと思つたのですもの』
『どうも御記憶の良い事ですな』
『どういたしまして、時に今日は私の日でございますね』
『そうでしたかな』
『今、三越に來てゐますの、末社がありますのよ、お母さんと』
『お母さんと二人ですか』
お汁粉ぐらゐで大したことはあるまいと益田さんは思ひながら居ると、
『モシ〳〵、今日は土曜日で鞠子も健一も一箇中隊出動ですのよ、お待ちしてゐますわ』
大關揃ひでは大分に輕くなりそうだ、と、益田さんは思はずポケットを押へたものだ。
毎月のサラリー・デーには眞貴子さんキツト取りに行くのでサラリー奥様とニツクネームがついてゐる。實は其名目でうまいものを二人で喰べることに成つてゐた。一家郎黨押寄せたのでは、たまらないなあ、と、益田さんは考へながら三越さして急いで行つた。（未完）

ソリウタオネはに核結
淋病にはゴナイン
…花柳病科…
藤原医院
★戎橋筋溝ノ側西入 ★電話戎二六六〇三六六番★
淋病にはゴナイン
ソリウタオネはに核結

その時折りの記

姉小路　孝

○

久し振りに五郎を見て、たいへん面白かつたので、この替りを待つて見に出かけたが、こんどはサツぱり面白くなかつた。狂言の立て方が不味かつたためであらう、五郎のあの熱演を以つてしても、一向に面白くなかつたのである。

由來、如何なる劇團でも、狂言の撰擇配列の甲乙に依つて、餘程芝居全體の成果も違ふし、從つて見る側の受ける印象も異ると思ふ。

殊に五郎劇や家庭劇の場合の如く、その作者が特定の人に限つてゐる場合、そして、その特定の人が撰擇權を握つてゐる場合、特に注意しないと、此の弊に陷入り易い。

五郎などは五ツの狂言の內、四狂言出ツぱりの勉強家で、肉體的にも非常な過勞を覺えるだらう。

そうした過勞が直接舞臺に影響して、芝居に支障を來たす樣では、甚だ以つて考へねばならないことであらう。

幸ひ五郎はたいへん健康に惠まれて、そうした氣配の見えないことは喜ばしいが、幾ら嚴丈な體でも、もう歲が歲だから、そろ〳〵體も勞つてやらねばなるまい。

さすれば、狂言の撰擇も追ひ〳〵此の方の制肘を受けて、今迄のやうに自由に振舞へなくなつて來るに相違ない。

されば、これからの五郎は、狂言の立て方にも、大いは惱み拔いて行くこゝが推察出來る。

○

五郎の一座には實に美しい女形がゐる。これは五郎一座の特色として大いに賣物に出來ると思ふ。

桃蝶を筆頭に秀蝶、菊蝶と、女らしさの點からのみ云へば、他の劇團には見られない特種な存在として異色がある。殊に桃蝶は、臺詞に一癖なまりはあるが、芝居にかけては相當な腕を持つてゐるから、五郎一座の中では珍らしく芝居をしない二三蝶あたりと取組ませて、一つの出しものも考へれば、案外面白い芝居が見られやしないかと考へる。何れにもせよ桃蝶は、まだ〳〵賣れる人であらう。

○

南座は一月の下旬から二月一パイ家庭劇、三月が五郎劇で、この調子だと喜劇ばかり立て續けに五の替りまで見せられてゐる譯になる。

これでは、お客もたまらないし、仕打ちの方もやり憎くからう。偶々吉右衛門が神戸まで足を延して來演したのだから、何故最初の十日間を南座で開け、神戸はその間に五郎劇を上演して、十日過ぎてから振替へるやうな方法に出ないのだらう。そう云ふ理想論の不可能な理由は、屹度昔からの歌舞伎劇團の惡い因習を禍ひして、事を容易に運ばせない爲だと思ふが、この狀態では段々お客が滿足しなくなることは必定だ。

世には歌舞伎の不振を唱へるものが多いが、その原因は敢へて歌舞伎劇と近代との時代錯誤の爲ばかりではない。かうした些細な點にまで惡い因習が付纏つてゐる點に、主要な不振の原因があるのではないだらうか。

○

新派五十年記念興行の顏ぶれは、新派の巨頭が殆んど顏を揃へた豪華なものだが、舞臺で一度も顏合せをしないのが、見たところ甚だ喰ひ足りないのを遺憾とする。

興行の賣り方では新派大合同となつてゐるが、これでは全く合同の意義をなさない。

尤もかうした惡傾向は決して、今回に限つたことではない。例へば先月の鳳治郎追善興行の菊五郎の體度だつてこの通りだつた。

あれで東西合同歌舞伎の內容を具へてゐるものと思つたら飛んだ思ひ違ひである。

僕に云はすれば、あれでよく六代目の氣持が平氣で居られたものだと思ふ。

見てゐる方が氣が科めた位ひのものだ。

僕は六代目の藝には心から敬服してゐる。しかし、六代目の追善興行に對する心がまへには、敬服出來ないものが多分にあつた。

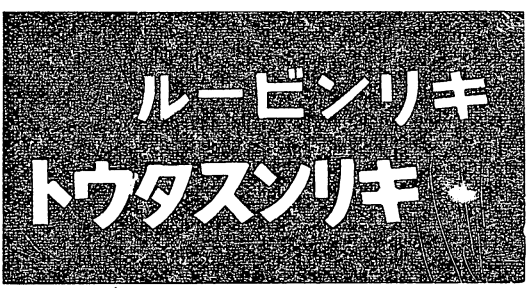
兎に角合同をして合同の意義あらしめない近頃の惡傾向を難詰したい。

堀頓道

一冊　三十錢

一ケ年　三圓三十錢

送料共



道頓堀俳壇

（春季雜吟）　日比煤蓑選

春の浪淡路へ渡る船おそし　雨汀
春の浪遊覽船は筋違ひに　同
岩角の苔は光りて春の磯　同
芹摘みや鮮女が赤き髪飾り　ゆ紀子
捨猫の聲もかすむや朧月　同
春病みて夢うつゝにも析の音哉　同
踏切は春の曉焚火して　寶山
霞より日はさし出でゝ村の中　同
春雨の降るとも知らず紙芝居　てい
接木せし人は異國に桃の花　同
近き山陽は照りながら霞みけり　禎子
今年花少なし庭の白木蓮　同
植えかへて惠みの雨や沈丁花　友治郎
朝東風に馬曳く人も歌ひ行く　同
柳の枝二階に近く芽くみ來て　霞風
夕着きて宿に一本糸ざくら　同
窓あけて女は東風に吹かれゐる　ふみ
船人に物言ひかける麗らかさ　同
障子あけて見上ぐる庭の大木蓮　蛙水
麗らかさバスから村を見渡して　柵外
病む身にも髪すき直す春日哉　たつ子
何の氣もなく蓬摘んで見る　とも枝
草に居て蓬そろうる媼かな　雨紅
並び住む家の境の糸櫻　古傘
桃咲けばたゞに故郷のなつかしき　露口
晝すぎや蝶は疲るゝ背戸の中　桃郷
蝶々に戯るゝ畦の小犬かな　竹子
うす埃り蝶舞ひ上る橋の上　佳水
普請小屋木屑に遊ふ蝶々哉　泉子
砂丘より蝶吹き上くる日和哉　幸詩郎
幼な兒のすでにいびきや春の宵　とく

選者吟

木々の芽を育くむ夜の深山鳥
こま〳〵と住宅建ちぬ木の芽垣
木の芽風日曜の莊も開け放つ

編輯後記

★

四月薫風駘蕩號をお屆けします。今年の春は、角座の「あしべ踊」大劇の「春のおどり」それに京都にはT・S・S・Kが颯爽來演して、例年以上の踊りの春を現出して、私達の心を浮き立てゝ呉れる。こゝさながらの春の繪模様です。

★

本誌も前號に次ぐ春の特輯第二陣を承るものとして、春の特選隨筆號と致しました。諸先生方の千紫萬紅の麗筆は、必ずや櫻花と研を競ひてなほ餘りあるものが多々あることゝ存じます。あたかも花の香おくる軟風の風情でありませう。

★

誌友クラブも幸ひに陸續申込みありと池尻君より欣然内報がありました。近く第一回のパアテイーも計劃中であり、色々と特典も御座ゐますので、是非共此の際、お一人でも多くお友達お誘合せの上御入會あらんことを切にお薦め申上げます。

（京都・大橋孝一郎）

★

今月號は發行豫定日より大變遲れまして愛讀者の皆様に申わけありません。編輯子もハリキツテ着々準備をしてゐたものゝ、道頓堀の多忙さに卷込まれて意外の大番狂はせでした。

次號は大いに自重せねばと獨り力んで居ります。

★

先月末、本誌の愛讀者であり劇通家である九州の大久保佳章氏が來阪せられまして、初にお目通り致しました。

氏の芝居趣味は、廣さもあり、深さもあつて大いに感服するとゝもによき後進の指導者であると感銘致しました。

尙氏の貴重なる御言葉は次號で御報會申上ぐる心算で居ります。

★

讀者の皆様と大いに親睦を計る意味と演劇映畫の研究機關として本誌が提唱する誌友クラブも追々と加入者が增大して居ります。

この際是非御入會をお薦め致します。

★

病床から本誌の爲に玉稿を寄せられた津村京村氏が本誌發行前に突如逝去されました。

計らずもこの「春・女・芝居」――は絶筆となり、本誌を悲しく飾る一頁となつた次第です。

編輯後記を書くに當つて故人の御冥福を祈り擱筆致します。

――池尻勝彦――

× × ×

× ×

昭和十二年四月一日發行
月刊雜誌『道頓堀』第十二年第百廿七輯

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金三拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十二年四月一日印刷
昭和十二年四月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥江銕也
共同編輯 山上貞一
印刷所 松本泰三
道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十二年三月廿八日印刷（毎月一回）
昭和十二年四月一日發行
「道頓堀」第百廿七輯第十二年四月號

松竹京都特作品

炎陽の旅

林長二郎主演

犬塚稔 脚本監督
片岡清 撮影

北見禮子 志賀靖郎
坂東橘之助 梅田菊藏
井上久榮 朝田一郎
中村吉松 石原須麼男
風間宗六 中村政太郎
山路義人 小川時次
新妻四郎

〝陽炎もゆる秋の街道に展開する一篇の抒情詩〟

犬塚・長二郎のコンビが「お夏清十郎」以來一年振りで世に問ふ野心作！

「道頓堀」 第百廿七輯 第十二年 四月號

一部 金參拾錢